

親鸞聖人稲田草庵とその環境

今 井 雅 晴

はじめに

本日は、親鸞聖人が四十二歳から約二十年住んでおられました関東でのことを、常陸国笠間郡の稲田郷に設けられました稲田草庵を中心にお話を申し上げます。

私は歴史学を専門にしております。そこで本日は歴史学的観点からのお話ということになります。その観点から稲田という地域の地理的・社会的環境、そのなかでの人間のあり方を検討し、親鸞聖人がどのような環境のなかで活動されたのか見ていきたいと考えております。

一 従来の関東と稲田のイメージ

親鸞聖人が関東へ移住したことについて『最須敬重絵詞』第一巻に次のように記されています。

事ノ縁アリテ東国ニコエ、ハシメ常陸国ニシテ専修念仏ヲス、メタマフ。

〔真宗史料集成〕第一巻・九三三頁

親鸞聖人のころ、「東国」というのはほぼ現在の関東地方と東北地方を指していました。ただし、「関東」ということばは地域を示す概念ではなく、鎌倉幕府のことを指していました。親鸞聖人は関東地方で活動しましたので、『最須敬重絵詞』でいう「東国」を、その一部の関東として話を進めます。まず聖人の家族を系図として記しておきます。



従来の真宗史では、関東と稲田はどのような所で、親鸞聖人はどのように活動されたのかということについて、いくつかの固定されたイメージがあったように思われます。それは次の三つです。

- (1) 関東の荒野に一人立つ親鸞聖人
- (2) 一文不知の人々に初めてお念仏を伝えに来た
- (3) 人里離れた稲田に住む親鸞聖人

全体をまとめれば、親鸞聖人は文化はなやかな京都から日本海の荒波が打ちつける越後に流され、さらに荒れはてた文化果つる関東へ移られて、無知な人々の間で大変だったなあ、ということになります。

しかし、この三つのイメージははたして正しいでしょうか。正しくはない、というのが私の認識です。歴史学研究

は日進月歩、少しずつでもどんどん進むのです。右の(1)については、明らかに誤りです。関東は荒野ではありません。特に親鸞聖人が長く住まれた稲田のある常陸国は農産物が豊かな国でした。それに親鸞聖人は関東で一人孤独な生活を送ったではありません。妻の恵信尼と子どもたちも一緒でした。その上、関東には聖人の師匠法然上人の門弟たちが各地に散在していました。連絡を取ることも可能でした。布教の苦労はあったに違いありませんが、「荒野」「一人」というイメージは改められるべきです。

右の(2)についても同様に改められなければなりません。たしかに関東の人々は文字が読めない人が圧倒的に多かったです。ただ、親鸞聖人当時、文字が読めるのは貴族や僧侶だけで、農民は読めないのが普通でした。武士であっても、読める人は少なかったのです。そしてこれは日本中どこでもそうでした。京都であっても同じです。まるで関東の人々だけが文字が読めないような印象を与えるいい方はよくありません。

それに、念仏は親鸞聖人が初めて関東に伝えたものではありません。念仏（阿弥陀信仰）や法華経信仰、観音信仰などはそれこそ日本中に広まっています。鎌倉幕府の初代將軍源頼朝の妻北条政子は、法然上人から念仏について手紙で指導を受けていましたし、親鸞聖人を稲田に招いたと推定される豪族宇都宮頼綱は、法名を実信房蓮生と名のつた法然上人の有力門弟でした。念仏を称えて亡くなった荒武者熊谷直実も、法名を法力房蓮生という法然上人の門弟でした。

これら専修念仏の広まり以前からも、念仏信仰は関東に存在していました。親鸞聖人が初めて関東に伝えたわけではありません。ただし、聖人は従来とは異なる内容の念仏を関東の人々にもたらしただけです。

右の(3)についても、見方を改めなければなりません。稲田は人里離れた、淋しい所ではありません。にぎやかな所でした。だいたい、布教のために関東へ移住したのに、誰も人がいない所に住んでも意味がないではありませんか。

では、当時の「関東」と「稲田」についてその状況を再検討しながら確認していきたいと思えます。

二 「関東」と「稲田」についての再検討

まず『親鸞伝絵（本願寺聖人伝絵、御伝鈔）』下本に出る、親鸞聖人が越後から稲田に移住したことについての有名な文章を引用し、内容を確認したいと思います。

聖人越後国より常陸国に越て、笠間郡稲田郷といふ所に、隠居したまふ。幽栖を占といへとも道俗跡をたつね、蓬戸を閉といへとも貴賤衢に溢る。仏法弘通の本懐こゝに成就し、衆生利益の宿念たちまちに満足す。

（『真宗史料集成』第一卷・五二六頁）

「親鸞聖人は越後国から常陸国へ移って来て、笠間郡稲田郷という所に【**隠居**】されました（隠れ住まわれました）。【**幽栖**】を望まれました（ひっそりと生活することを望まれました）が、僧侶や俗人が聖人の家を訪ねて来て、【**蓬戸**】を閉じていました（めったに開かないので蓬の類いの草が生えてしまった門の戸を閉じていました）が、身分の上下の人たちが大勢門前の道に集まっていました。正しい仏教を広めたいという聖人の本来の目的はここに達せられ、人々を助けたいという長年の思いは十分に成果をあげました」。

ではまず「関東」と「常陸国」について見ていきましょう。

(1) 常陸国は豊かなところ

北関東には、かつて毛野国という、一種の独立国家があつて栄えていました。関西では大和国が、山陰地方では出雲国という国家があつたところです。毛野国は群馬県と栃木県が中心でした。毛野国は大和国に吸収され、二つに分けられ、京都に近い地域（西）が上毛野国で略して上野国、遠い方（東）が下毛野国略して下野国となりました。常陸国は下野国のさらに東にあり、太平洋に面しています。北関東は、古代から豊かな地域だったので。

平安時代中期の『延喜式』によれば、日本全国六十六ヶ国を四段階に分けています。税金が多い国から少ない順に
大国、上国、中国、下国となります。なんと常陸国は大国でした。現在の茨城県は、常陸国全部と下総国の三分の一
ほどでほとんどが成り立っています（あと、陸奥国と武蔵国の一部分）。その下総国も大国です。また上野国も大国、
下野国は上国です。北関東はほとんどが大国です。税金が多いということは農業生産物が豊かということで、当然生
活もしやすいということになります。

さらに同じ平安時代の『和名類聚抄』では、諸国を税金の多い順に並べています。それによりますと、もつとも税
金高の多いのは陸奥国で、その次がなんと常陸国なのです。国の面積から考えれば、実質的には常陸国が一番豊かと
いうことができるでしょう。

また朝廷には親王任国という慣行がありました。国司の第一等官である「守」には親王を任命する国、という意味
です。その親王は実際には任地に赴任せず、俸給だけを与えます。それは必ず豊かな国です。もちろん、常陸国は親
王任国でした。

このように豊かであるからには関東及び常陸国は荒野ではありえないでしょう。山もあれば平野もある、河や湖沼
も多い、海にも面している、海では北からの寒流（親潮）と南からの暖流（黒潮）がぶつかるといふ地理的特色から
判断しても、常陸国（下総国も）は農林水産物の豊富な地域だったのです。

(2) 稲田は賑わっていた

では豊かな常陸国のなかで稲田はどのような所だったのでしょうか。現在の笠間市大字稲田は、東西約四キロメー
トル、南北約三キロメートルのジャガイモのような形をしています。北部は稲田草庵が麓にある稲田山から栃木県へ
の県境の山々へと続きます。西から南も小高い丘が続き、中間には田圃です。親鸞聖人のころは沼沢地が多かったも

のと思われます。田圃の中を流れる稲田川は東に向かって流れ、笠間郡の中央部を通って涸沼川に合流します。この涸沼川は南東に向かって流れ、やがて涸沼という広大な沼に入ります。この付近に小鶴荘という常陸国で二位三位を争う大きな荘園があります。この荘園は撰閲家である九条家の領地です。このことについては後に述べます。

周囲が山に取り囲まれているという大字稲田の地形的特色から、かつての稲田郷もほぼ同じ地理的範囲だったのではないかと推定されます。

現在、稲田の中央部を東西にJR水戸線が走っています。並行して国道五〇号も通っています。ところが平安時代から鎌倉時代、稲田には南北に縦断する街道が通っていました。そして稲田には大神駅（おおかみのうまや。大神駅家とも表記しました）という宿場があったのです。駅（うまや）というのは、国家の公的な運送に使う馬が準備されていたり、役人が常駐したりしていた交通の要所でした。江戸時代的な表現をすれば、駅は宿場町であったということです。

一般的な交通の要所を、この時代には宿（しゆく）といました。今日風にいえば、宿には旅館や商店が立ち並び、商業も盛んに行なわれていました。その賑わいの様子は京都から鎌倉までの旅行を記した鎌倉時代の『海道記』や『東関紀行』、『十六夜日記』などに記されています。『海道記』に相模国西部の橋下宿付近のことを次のように記しています。

橋下の宿をすぐれば、宅をならぶる住民は人をやどして主とし、窓にうたふ君女は客をとどめて夫とす。

稲田は宿場として賑わっていたのです。さらに稲田が賑わっていたであろう理由がもう一つあります。それは大神駅の「大神」の名に由来します。この大神とは、稲田にあった大神社の稲田神社によるのです。

平安時代、朝廷は全国の神社とそれを取り巻く勢力を把握しようと努めます。そのための一手段として、有力神社を四階級に位置づけして資格を与えます。それは、まず有力神社を規模の大きい順に大社、中社、小社の三階級に分

けます。そして大社のなかでもさらに有力な神社には名神大社という資格を与えました。

名神大社は祭神の由来はもちろんながら、領地も広く、神官や僧侶も多く、神社を守る軍勢力も大きい存在です。『延喜式』神名帳によれば、常陸国には鹿島神宮をはじめとする七つの神社が名神大社として指定されたことが確認できます。そしてなんと稲田神社もこの七つのうちに入る名神大社だったのです。

「常陸国作田総勘文案」（税所文書）という史料があります。鎌倉時代から南北朝時代に常陸国の国府の税金を取る役を世襲した税所氏が伝来した税所文書のなかの一つです。弘安二年（一二七九）に作られました。親鸞聖人が京都で亡くなってから十七年後です。「常陸国作田総勘文案」は、常陸国の国府でいったい常陸国にはどのくらいの田があるか、調査して書き出したものです。税金を取る基本台帳とするためです。当時、税金は田と家単位の人にかかけられました。後者を在家役といいます。畠には直接には税はかけられていません。

この文書によれば、稲田神社は「十七丁小（十七町と三分の一町）」という面積の田を所有していました。坪数に直せば六万二千四百坪です。当時、一坪は六尺三寸（約百九十センチ）四方ですので、現在のメートル法に改めると約二十二万五千平米という大変な広さになります。

稲田神社はこの他に広い畠や山林を持ち、構成員として神官と僧侶、さらには僧兵たちがいたのです。その門前である大神の駅は、これも江戸時代風にいえば門前町であったのです。

親鸞聖人の稲田草庵はいつたどこにあったのでしょうか。稲田草庵は、『親鸞伝絵』などの絵から判断して、草庵を継承するといわれている現在の西念寺の位置かその付近にあったと考えられます。その稲田草庵の参道入り口にある道を北東の方向に三、四百メートルも行くと、稲田神社の参道入り口にある大鳥居に到着するのです。なんと稲田草庵は稲田神社の境内もしくは門前近くにあったことと推定されるのです。

つまり親鸞聖人は宿場町としてまた門前町として栄えている稲田に草庵を構えたのです。私たちは稲田草庵が置か

れている環境について認識を新たにしなければならぬのではないのでしょうか。私たちは覚如の『親鸞伝絵』にある「隠居」「幽栖」「蓬戸」ということばに惑わされてしまったのです。覚如が初めて常陸国に来たのは『慕帰絵』や『最須敬重絵詞』によれば正応三年（一二九〇）のことです。関東のなかにおける稲田の状況をどの程度正確に把握できたか、また記憶に残したか、さらには『親鸞伝絵』作成にあたって文章をどのように修飾したか、私たちはよく考える必要があると思います。なお「常陸国作田総勘文案」は通称して「弘安の大田文」といっています。

もう一つ、稲田神社について重要なことがあります。それは親鸞聖人の『教行信証』執筆にかかわることです。当時、大きな神社の構成員はどこでも少数の神官と大多数の僧侶とで成っていました。なぜなら、本来、神道の教義は単純明快で無いに等しいものでした。しかし時には詳しい教義で説明することが必要な場合もあります。その場合には仏教の教義を借りていました。そのために多数の仏教書と多くの僧侶がいることが普通でした。当然、稲田神社も同様だったと考えられます。

親鸞聖人の関東の住所はいくつかあったといわれています。しかし稲田がもっとも長く住んだ場所であることは間違いないでしょう。ではなぜ稲田だったのか。それも稲田神社の境内もしくは門前と推定されるところに。それは稲田神社には仏教書がたくさんあり、勉強家の聖人にとつても便利な所だったからではないかと私は推定しています。これが『教行信証』執筆につながっていくのだろうということです。

よく、親鸞聖人は『教行信証』執筆のため鹿島神宮に通って仏教書を閲覧しただろうといわれてきました。たしかに鹿島神宮は京都方面からの文化がもっとも早く常陸国に到着した所でしょう。黒潮に乗れば紀伊半島沖から二日もあれば房総半島沖に到着します。そこから鹿島までは海上からもうすぐの距離です。

しかし稲田から南の方角にある鹿島までいったいどのくらいの距離があるのか、これも私たちはほとんど無視していたのではないのでしょうか。直線距離で六十キロもあるのです。途中、川もあれば沼もあり、険しい山もあります。

だいたい、稲田を出たばかりのときでさえ、吾国山という高い山を西の方に六キロばかり迂回しなければなりません。そしてとても低い山である板敷山を越えて南方に行くのです。鹿島神宮には片道二日、往復四日ばかりです。神宮でも閲覧やメモのためには一日や二日では済まないでしょう。全部で最低一週間以上はかかるでしょう。この間、稲田草庵では多くの子どもを抱えた妻の恵信尼さまが待っているのです。親鸞聖人は家庭生活も維持しなければなりません。稲田神社ならばその家庭生活の合間に書籍を見せてもらえ、また借り出して読み、メモを取ることも容易だったろう、と私は考えています。十分な勉強ができたのです。『教行信証』執筆にかかわって、親鸞聖人が稲田に住み続けた理由はここにあつたろうと思います。どうしても鹿島神宮がいいなら、鹿島に住めばいいのです。しかし聖人が鹿島に住んだ痕跡も伝説ありません。次に述べますように、稲田神社ならば領主からの便宜をはかってもらえるという有利さもあるのです。

親鸞聖人の関東での住所の一つに、大山草庵があります。常陸国奥郡のなかです。現在の茨城県東茨城郡城里町阿波山です。この大山草庵は、稲田草庵と同じく、大神社の参道もしくは境内にありました。その神社は阿波山上神社といえます。奈良時代から存在していたことが分かっています。また聖人が越後に流されたとき、最初に参詣したのは居多神社であつたと伝えられています。

従来、親鸞聖人の神祇不拝ということがいわれてきました。しかし親鸞聖人の伝記をよくよく調べると、稲田神社、阿波山上神社、居多神社のようにとても聖人に身近な神社が浮かび上がってくるのです。これはいったいどういうことでしょうか。それは、私たちは明治初年の神仏分離・廃仏毀釈以降の神仏観が抜けないということだと思います。親鸞聖人の時代、人々は神と仏の関係をどのように把握していたのか。現代の私たちが思うようには分けていなかったということでしょう。

では次に笠間郡と稲田郷の領主について見ていきたいと思います。

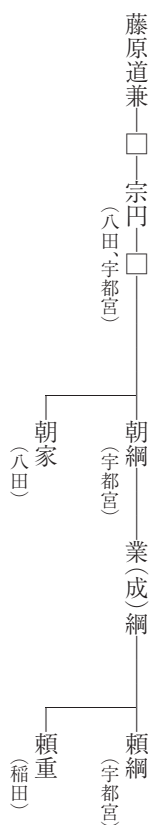
三 笠間郡稲田郷の領主・宇都宮頼綱

(1) 下野国南部の大豪族

宇都宮頼綱というのは、下野国南部から常陸国笠間郡にかけて広い領地を持った大豪族でした。親鸞聖人の稲田移住について、従来、宇都宮頼綱という豪族が関わっていたであろうということはほとんど語られたことがありません。稲田の領主稲田頼重が招いたと、西念寺の伝えでいわれていたのみです。しかし西念寺の伝によれば、親鸞聖人四十二歳のとき稲田頼重は二十六歳です。しかもわずか一郷しか領有していない常陸国の小豪族が、夫婦ともに貴族出身の親鸞聖人一家をどのようにして招くことができたのか。聖人一家はどのような理由で行ったこともない地方の小豪族に運命を託す気になったのか。私はずっと疑問でした。

しかし現在、親鸞聖人一家の生活を保証して稲田に招いたのは、西念寺の系図では頼重の兄であり父代わりでもあった宇都宮頼綱であろうと私は推定しています。

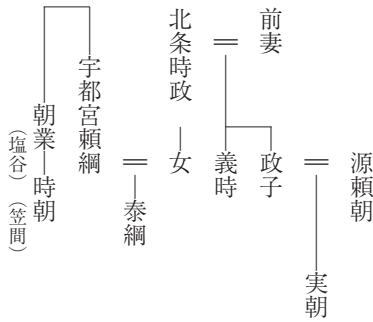
宇都宮頼綱は藤原氏の一族とされています。藤原道長の伯父道兼の曾孫宗円が関東に下向して、常陸国八田（茨城県桜川市）に領地を得、その南部の真壁郡あたりに勢力を広げました。また下野国の有力な寺院宇都宮の支配権を得てから宇都宮と名のりました。宗円の孫朝綱と弟の八田朝家は源頼朝の鎌倉幕府創業に手柄をあげています。この朝綱の孫が頼綱です。



(2) 笠間郡（新治東郡）への侵略

元久二年（一二〇五）年、六月、頼綱は大軍を率いて国境を越え、笠間郡に攻め込みました。笠間は豊かな土地ですから、宇都宮氏は長年にわたって狙っていたのです。たまたま、笠間郡中央の佐白山にある正福寺と、同郡北部の徳蔵寺との争いが起こり、頼綱は正福寺の要請に応じて出兵し、徳蔵寺を滅ぼしました。

ところが同年八月、頼綱は鎌倉幕府の内紛に巻き込まれました。執権北条時政と後妻の牧の方が、將軍源実朝を廃し、娘婿の平賀朝雅を擁立しようとしたのです。時政の先妻の息子義時と政子は反対して、京都にいた朝雅を攻め殺し、時政と牧の方を伊豆に幽閉してしまいました。宇都宮頼綱は、朝雅と同じく時政の後妻の娘を妻にして泰綱という息子を儲けていたために、謀反の疑いをかけられて一族全滅の危機に瀕しました。頼綱は出家し、一族郎党六十余人のもどりを鎌倉の義時の屋敷に届けに行つてやっと勘弁してもらいました。



こののち頼綱は再び笠間郡での活動を開始し、九月には徳蔵寺勢力をほろぼし、笠間郡を完全に支配下に収めてしまいました。

「笠間郡」という名称は、実は私称なのです。正式には新治郡です。この郡は東西に伸びていて、便宜的に三つに分けられ、東から新治東郡、新治中郡、新治西郡と呼ばれていました。中郡は莊園化して中郡莊と呼ばれていました。そしてのちに笠間郡と呼ばれるようになったのが新治東郡でした。宇都宮氏は、やがて自分たちが支配下に収めた新治東郡を、その中心地の地名を採って笠間郡と呼ぶようになったのです。「笠間郡」という名称の史料上の初見は十三世紀中葉ですから、親鸞聖人が関東へ来たときに「笠間郡」の名称があつたかどうかは不明です。たしかに『親鸞伝絵』には「笠間郡」とありますが、『親鸞伝絵』は「笠間郡」が使われるようになってからの成立ですので、覚如が「笠間郡」という名称を使つてもなんの不思議もありません。

宇都宮頼綱は占領した笠間郡を甥の時朝に譲ります。もつとも時朝はこのとき数え三歳ですから、笠間はまず時朝の父で頼綱の弟の塩谷朝業に任せた可能性もあります。



(3) 法然の門弟となる

出家した頼綱はやがて京都に上り、法然の門に入りました。もつとも、地方の豪族が世を完全に捨てて念仏に帰依したという性格のものではありません。宇都宮氏の物領は形の上では弟の塩谷朝業に譲りました。朝業は鎌倉に詰めて將軍実朝に忠誠を尽くします。二人の心は通いあつたようで、のちに実朝が鶴岡八幡宮の境内で暗殺されると、朝

業はそれを悼んで出家しているほどです。

頼綱は形のうえで惣領を譲りましたけれども、しかし実質的には依然として宇都宮氏の指導者でした。それに、出家してはじめて京都とのつながりを持ったものではありません。宇都宮氏は宗円以来、半分は足を京都に置いていました。代々の妻は京都から迎えています。頼綱に至って初めて、関東の豪族たちから妻を迎えるようになったのです。頼綱の妻は複数おり、その一人が北条時政の娘だったのです。

ですから、のちに頼綱の娘が和歌で知られた藤原定家の後継者為家の妻となりますが、これは和歌の家と地方豪族が婚姻を結んだというようなものではなかったということでしょう。

頼綱は法然から実房蓮生という法名を与えられます。蓮生という法名は、関東の荒武者として知られやがては熱心な専修念仏者となった熊谷直実の法名をもらい、読み方を変えたのだといわれています。直実の房号・法名は法力房蓮生です。直実の法名については、「蓮西」「恋西」と記されている史料もあります。「生」と「西」の共通した読み音は「せい」ですから、直実の蓮生は「れんせい」と発音していたに違いありません。そこで頼綱は「れんしゅう」です。

法名はもらい、剃髪はしましたがけれども、頼綱は俗人としての活動を続けていました。しかも関東の有力武士団を抱えた上での京都での活動です。頼綱は法然の専修念仏者一統を守っていました。承元元年（一二〇七）の法然以下八人の流罪、四人の死罪のときにはその働きは表面に出ていません。しかし嘉禄三年（一二二七）、法然没後の嘉禄の法難のときには大いに働いています。比叡山の僧侶たちが東山の法然の墓所を暴くという話が伝わってくると、法然の遺骸を掘り出し、武士団とともにそれを守って西山に運び、茶毘に付して埋葬したのです。この前年、頼綱は宇都宮氏の惣領を息子泰綱に継がせ、自分は本格的に京都での活動を始めていました。弟朝業も、法然没後の門弟として信生房と名のついでいました。

頼綱は、親鸞聖人より五歳の年下です。法然門下の俊秀である親鸞聖人のことをよく知っていたに相違ありません。三十代前半という若さにもかかわらず、門下に入って数年も経っていないのに『選択本願念仏集』の筆写を許されたこと。法然の信心と門弟たちの信心とは差はないと確信し、また念仏の回数の問題もきちんと法然の考えを受けとめていること。

頼綱は、その親鸞が越後に流されたことを心配していたでしょう。越後といえば、頼綱の下野国からそう遠い地域ではありません。そして親鸞が関東へ行きたいという希望を持っていると聞き、それならと、自分の領地へ招いたのではないのでしょうか。

従来、親鸞聖人が関東へ移住するについて、聖たちの集団に混じって行ったとか、善光寺聖になって行ったとか、太子堂に泊まりつつ行ったとか、あてもなく移動したように言われてきました。しかし貴族出身の妻恵信尼さま、数え四歳の信蓮房、その三、四歳年上の小黒女房四人で、そんなあてのない旅ができるはずありません。まして恵信尼さまが関東行きを承知するはずがない、と考えるべきでしょう。やはり親鸞聖人と恵信尼さまは関東で生活できる保証を得て、移住したものでしょう。

関東移住の目的は、私は幕府の存在であると推測しています。鎌倉時代には京都およびその付近で弾圧され、あるいは意を得なかった僧侶が鎌倉へ行く例が多く見られるのです。新興勢力である武士の都に行って、新しい見方で自分の信仰に接してもらおう、自分は正しい、それが必ず分かってもらえるはずだ、ということでしょう。同じ行動を取った僧侶に、臨濟宗の栄西、現在の浄土宗の基礎を固めた良忠、真言律宗の忍性と叡尊、時宗の一遍、日蓮宗の日蓮などがいます。

さらにまた鎌倉は狭く、警戒が厳しいので、執権北条氏あるいはその近い親族の推薦と招きがなければなかなか入れません。良忠は関東を数年廻って機会を待ち、忍性は筑波山の麓の三村で十年にわたって信用をつけていったので

す。

頼綱の領地で鎌倉にもっとも近い所が稲田です。三村から稲田はすぐです。つまり稲田だつて鎌倉を睨む位置にあるのです。

それに、稲田にある稲田神社の存在は貴重です。名神大社であるからには多数の僧侶がいて多くの仏教書が所蔵されていたに違いないのです。親鸞聖人が勉強するのに好都合です。この稲田の環境が十年後の『教行信証』に結びついたと思うのです。

四 九条家領常陸国小鶴荘

(1) 恵信尼の父三善為教は関白九条兼実には仕える

平安時代・鎌倉時代の朝廷の職は、適材適所ではなく、希望する多数の者の中から、コネとカネによって与えられたのです。中下級貴族の職は撰閑家等の上級貴族によって決められました。中下級貴族は、いずれかの上級貴族に取り入れなければ職は与えられませんでした。上級貴族を主家とする必要があります。

恵信尼さまの父三善為教は、九条兼実の日記『玉葉』に「三善為則」として出てきます。為則の越後介を「解任」した、とあります。「解任」したとあるからには、それができるのは任命した兼実自身です。つまり、三善為教は九条兼実に仕えていた家司だったのです。

兼実には任子という名の娘がいました。任子には乳母をはじめ家司たちの妻や娘が大勢で教育にあたっていました。将来の天皇の后にするための教育です。恵信尼もその一員となる予備軍だったでしょう。なぜなら、恵信尼は任子の九歳年下だったからです。

文治六年（一一九〇）、十八歳の任子は後鳥羽天皇十一歳の中宮になりました。彼女を取り巻く女性たちも大挙し

て従ったはずで。中宮ならば部屋（房）をもらえる女房たちだけでも三、四十人います。彼女たちは中宮を盛り立て、皇子の誕生を期待するのです。恵信尼さまは、おそらくその四年後、十三歳のときから宮中が上がって任子に仕えたものでしょう。

建久六年（一一九五）、任子は後鳥羽天皇の第一子を生みました。しかし皇女でした。続いて兼実の最大の政敵であった源（土御門）通親の娘が皇子を生みました。三年後に即位した土御門天皇です。翌年、任子は宮中を追い出され、兼実も閔白を罷免されました。このとき任子は出家を希望したけれども、兼実が制止したといえます。任子二十六歳、恵信尼さま十七歳のときです。

任子と恵信尼さまには共通点がありました。それは二人とも法然の教えを受けているということです。九条兼実とその妻兼子と任子が法然から何回も受戒していることは『玉葉』に記されています。そのこともあり、私は任子と恵信尼には主従の関係を越えた心の結びつきがあったのではないかと推定しています。

(3) 常陸國小鶴荘

やがて恵信尼さまは親鸞聖人と結婚しました。さらには越後に流される聖人についていきました。任子も心配したろうと思います。そして聖人は関東移住を望んでいました。一家が関東へ来て笠間郡稲田郷に落ち着いたとき、その東に接する小鶴荘という荘園の領主は、なんと九条任子でした。この荘園は常陸国で二、三位を争う広さの荘園で、九条家領だったので。これは偶然ではなかったろうと私は考えています。

平安時代の貴族たちの婚姻形態は、婿取り婚あるいは婿入婚が普通でした。当初は男性が通ったにしても、やがては妻の家に住み着きます。そして夫の衣食住の面倒をみるのは妻方の役割でありまた権利でもありました。婿が少年ならば、その教育も妻の父が行いました。九条兼実は十二歳で結婚して妻の家に入りました。すると妻の父は兼実の

教育をととても熱心に行っています。

つまり一家の運営は妻の役割でした。武士の場合は比較的早くから嫁入婚が行われました。夫が戦争にいつている間、信頼できる人に家の面倒をみてもらわなければなりません。それを妻が期待されたからです。

関東にいく恵信尼さまは、夫の側の保証だけより、自分自身の保証もあつた方が心丈夫であつたと思われれます。関東へ行くにあたって、親鸞聖人が恵信尼さまの気持ちを無視するのではなく、その希望を沿うべく計画を練つたと私は思うのです。その結果が目的地を稲田に選ぶことになったのでしよう。稲田から小鶴荘との境までは数キロです。小鶴荘の中心地であつた小鶴本郷までも十キロ余りで行けます。しかも稲田から東流する稲田川を舟で行けば、佐白山の麓で涸沼川に合流して、そのまま楽に短時間で小鶴本郷に到達するのです。

小鶴荘に行けば、京都との連絡は容易です。任子にも手紙を送れるし、実家三善氏にも援助を頼めるのです。京都の情報も手に入ります。

稲田は、親鸞聖人と恵信尼さま一家の生活のために、まさに非常に好都合な所だったので。

五 専修念仏の布教

(1) 呪術は当時の科学

『親鸞伝絵』下本に、

聖人常陸国にして、専修念仏の義をひろめ給ふに、おほよそ疑謗の輩はすくなく、信順の族はおほし。

(『真宗史料集成』第一巻・五二六頁)

とあり、また

『最須敬重絵詞』にも同様に記したあと、

コレヒトへ二辺鄙在家ノ輩ヲタスケテ、濟度利生ノ本意ヲトケントナリ。〔真宗史料集成〕第一卷・九三三頁

とあります。親鸞聖人が専修念仏の布教のために関東へ来たことはまず間違いないでしょう。そして『最須敬重絵詞』にあるように、「辺鄙在家」の人々を「濟度利生」しようとしたことも疑いありません。

しかし前述しましたように、関東にはすでに阿弥陀信仰、法華経信仰、観音信仰、弥勒信仰等、多くの信仰がありました。それは京都の一般社会と何ら変わるものではありません。そして日本中どこでも、それらの信仰の底には呪術がありました。おまじないを唱えれば、病気を治し、安産をさせ、畑の虫を追い払うことができるというものです。自分の力で社会や自分自身の状態を変えようというものです。いわば自力の信仰です。むろん、親鸞聖人の信仰は、人間の力は自分自身や自然の状態を変えることはできない、だからこそそのような人間を哀れんで廣大無辺の慈悲で救おうとしてくださる阿弥陀仏にすべてお任せしようというものです。

親鸞聖人にとつての困難は、呪術こそが当時の社会の科学だったことです。人々はそれに従って生活していました。それに、付近には信仰が十分に行き渡っているのです。他力はすばらしいと説いたところで、いったい何人が振り返ってくれたでしょうか。それに地頭や名主の下にいる農民たちには信仰を選択する権利はありません。地頭・名主、つまりは武士たちが親鸞聖人に顔を向けてくれなければ布教の実は上がりません。現実に、のちに二十四輩と呼ばれた有力門弟たちは、ほとんどが武士です。残りは京都から流れて来た貴族や僧侶たちです。

(2) 人間性

関東で親鸞に抵抗し、やがてはその門弟となった人物に山伏弁円がいます。門弟となったときの様子について『親鸞伝絵』下本では次のように述べています。弁円は親鸞聖人の信仰と布教活動が気に入らなくて、板敷山に隠れて聖人を殺害しようとしたのですが、どうしても出会えないことを不審に思っ、稲田草庵を訪ねていったのです。憤慨

しながら「親鸞、出てこい！」などと喚いたであろうと、『親鸞伝絵』は思わせます。ところが、

聖人左右なく出会たまひにけり。すなわち尊顔にむかひたてまつるに、害心忽に消滅して、剩後悔の涙禁じがたし。や、しばらくありて、有のまゝに日來の宿簪を述すといへども、聖人又おどろける色なし。

〔真宗史料集成〕第一卷・五二六頁

とあり、そこで弁田は親鸞に入門し、明法房という法名を与えられたといえます。

ここで注目すべきことは、親鸞聖人は専修念仏の教義を一言も説いていないことです。それなのに弁田の「害心」が「忽に消滅」、その上「後悔の涙」が止まらなかつたというのです。これは弁田が親鸞聖人の人間性にうたれたからに相違ないでしょう。「恵信尼書状」第三通に、二十九歳の親鸞聖人が、京都六角堂で観音菩薩の示現を受けたのち、

こせのたすからんするえんにあいまいらせんとたつねまいらせて、ほうねん上人にあいまいらせて、又六かくたうに百日こもらせ給て候けるやうに、又百か日、ふるにもてるにも、いかなるだいな風にもまいりてありしに、た、こせの事はよき人にもあしきにも、おなしやうにしやうしいつへきみちは、た、一すちにおほせられ候しを、うけ給はりさためて候しかは、

〔真宗史料集成〕第一卷・五二三頁

と、ひたすら法然聖人を慕うようになったことが記されています。引用史料の後半に「たゞこせの……みち」とあるのは、専修念仏の教えのことです。誤解を恐れずにいえば、専修念仏の教えというのはとても簡単です。「念仏を称えれば阿弥陀仏に救っていただける、他には何もいらぬ」という内容です。簡単だからこそ、教養がある人もない人も多数、法然聖人のもとに集まったのです。

ところが親鸞聖人は法然聖人のもとに百日も通いました。これはなぜだったでしょうか。いくら立派な内容であっても、人間は理屈・理論だけでは動かないだろうと私は思うのです。いくら内容がよくても、それを説く人間がだら

しなかったり、悪いことをしていたり、嫌な性格であつたら、その人について行こうとは思わないでしょう。大切なのは理論とともに人間性だろうと思います。

親鸞聖人だつて、当時、都で有名であつた法然聖人の専修念仏は知っていたはずですが、だからこそ、法然聖人のもとを訪れたのでしょう。その法座で機会を得てお話し、悩みも聞いてもらい、また教えも受けて、しだいに法然聖人に惹かれていき、この人のいうことならば間違いない、この人に従つて生きようと思われたでしょう。それが「うけ給はりさためて候」ということだつたのだと思います。

山伏弁円も、自分の生き方に悩みを抱えていたのでしょう。それが親鸞聖人に出会い、その人間性に接し、この人ならば自分を導いてくれる、この人についていこうと決心したのではないかと私は考えています。

親鸞聖人が関東の人々を説得できたのは、まず聖人自身の人間性であつたと思います。家族と一緒に生活も人々を説得するのに役立つことと思います。それらに惹かれて、すぐに病気が治ることを掲げない専修念仏の教えであっても、人々が耳を傾けるようになっていったのだらうと思うのです。

六 『教行信証』の執筆

(1) 参考文献をどこに求めたか

親鸞聖人が『教行信証』を執筆するにあたり、参考文献をどこに求めたのかというのは重要な問題です。関東へ行く目的は『教行信証』を書くためであつたという説もありますが、そのためでしたら越後に残っていたほうがよいのです。なんといっても親鸞聖人は前越後権介日野宗業の甥ですから。宗業は、聖人の越後流罪の一カ月前に、朝廷の臨時の除目で越後権介に任命されています。甥夫婦の越後での生活を守るためでしょう。現職の国司の甥ですから、従来の見方とは異なり、親鸞聖人の越後での生活は楽だつたはずですが、まして流人といつても聖人は凶悪犯でも何

でもなく、勉強熱心で真摯な念仏者だったので、国司の背景もあり、聖人は越後国分寺等の諸寺院での図書閲覧に十分な便宜がはかってもらえたはずです。わざわざ、宇都宮頼綱以外は誰も知らない、関東へなど行こうとは思わないでしょう。

関東では、親鸞聖人は稲田草庵に住んで、文献を読むために鹿島神宮に通ったとされてきました。しかし稲田から鹿島神宮までは直線距離で六十キロもあるのです。この間の状況は前述したとおりです。鹿島神宮に西国から到着した新しい書籍があることは確かです。時には閲覧に行つたでしょう。ただ日常的に鹿島神宮へ行くのは無理でしょう。そこで私は稲田神社に注目しています。この神社は鹿島神宮と並ぶ常陸国七つの名神大社の一つです。多くの僧侶と多数の仏教があつたに相違ありません。これも前述したように、稲田神社は稲田草庵のすぐ傍です。稲田神社の境内であつたろうという推定さえできます。まして親鸞聖人を招いたこの地方の領主宇都宮頼綱のお声がかかりであれば、神社側では文句なしに便宜を計らつてくれたはずです。

(2) 周囲の人々の知的レベル

親鸞聖人が関東で『教行信証』を執筆されたことは疑いありません。ただ完全に聖人一人で思考を廻らされたとは思えません。誰かと内容を話題にするなり、話し合つたりしたことも考えられます。まず妻の恵信尼さまでしょうが、専門の学者ではありません。門弟たちもいますが、聖人と対等にはなかなか無理でしょう。しかし稲田神社には多数の僧侶がいたはずで、彼らと話し合うことがあつたのではないか。逆に熱心な親鸞聖人に問いかけてくる僧侶たちがいたとする方が自然でしょう。

親鸞聖人一家が稲田に住み続けた理由の一つは、稲田神社の存在であつたろうと私は考えています。

またそれだけでなく、南方にある常陸国国分寺、筑波山中禅寺その他の大寺院が何ヶ寺も半径十数キロのなかに存

在しているのです。こちらにも多数の僧侶がいます。そこから話相手が出てきたとする方が、これも自然でしょう。私は稲田神社その他の高い知的レベルと環境のなかで『教行信証』が執筆されたと考えています。

おわりに

本日は親鸞聖人が関東での二十年間、どのような環境のなかで活動されたのかを見てきました。聖人に関する直接の史料は少なくても、周囲の確実な歴史的・地理的史料から明らかにすることは多いと思います。今後も研究を続けていきたいと思えます。